
小杉放庵の東アジア旅行と「東洋趣味」

本発表は、小杉放庵（1881－1964）が1910年代－30年代の東アジア旅行を通して、いわゆる東洋趣味に傾倒する過程に関する一考察を試みるものである。従来から、小杉放庵はヨーロッパ遊学の際に池大雅の作品と出会ったのを契機として、東洋的な作風に転じたとされる。その東洋趣味の実践としての創作旅行の成果では、芭蕉の「奥の細道」を辿って描いた作品はよく知られる。

しかしそれに対し、放庵が朝鮮半島、旧満州、中国などで行った創作活動に関する検証は、いまだ不十分である。発表者は彼の東アジア旅行がその東洋趣味の形成にとって非常に重要であると考え、ひとり放庵に限らず、漢学の吟味と中国書画の鑑賞に励む放庵の創作活動のあり方は当時の日中美術交流に無縁ではないと想定される。

放庵は日露戦争に際して、画報通信員として朝鮮、満洲に渡ったことがある。その後、度々朝鮮を訪れたが、1932年には国立公園協会の依頼で、金剛山へ取材旅行を行い、その成果を「国立公園洋画展覧会」に出品した。一方、1917年の中国旅行以来、放庵は東洋画題の作品を数多く制作し、そのジャンルで自分の作風を探索する意欲が沸いてきたことがうかがえる。特に揚子江に沿う水路旅行において、彼は南宋時代の文人・陸游の「入蜀記」を模範とする文人的な旅行への姿勢が注目される。友人であった芥川龍之介とも中国旅行について情報を交換した。さらに、1920年代は日本と中国の芸術文化の交流が盛んな時期であったが、放庵は中国美術の近代化と日中美術交流において重要な存在となった美術家劉海粟、錢瘦鉄ら、あるいは橋本関雪などと交遊した。古画研究団体「解衣社」を結成し、上海と東京で展覧会を開催して画冊も刊行した。また、彼は当時開かれた中国古画展覧会、中日絵画連合展覧会などにも関与した。ただ、こうして中国絵画への理解を深めつつ、放庵が自己の創作を内省的に見つめる傾向も見取れる。

ヨーロッパに遊学した日本人画家には当地での滞在経験と比較しつつ東アジアの旅先での印象を述べるだけの者が多かったが、放庵はむしろ東洋古典の理解を踏まえながら、東アジアを遊歴し創作活動を進めた画家の一人であったと考えられる。本発表では、小杉放庵の作品、日記、論著などの関連資料に加え、彼の東アジア旅行の実態を検証し、その視点から東洋趣味の内実を考察する。さらに本発表は、小杉放庵がその上で新南画の立ち位置を再確認していることを指摘し、その東アジア旅行と東洋趣味を近代日本美術史さらに東アジア美術史の中に位置づける視点を探る。